

## 古英語形容詞の補助部について

藤 原 保 明

### はじめに

現代英語の場合、動詞や名詞と同様、形容詞も *I am sure of that* や *He's good at linguistics* のように補助部 (complement) を伴うことがある (Declerck 1991: 37-38)。この補助部は一般に前置詞句、'that' 節、'wh-' 節、'to' 不定詞、'-ing' 節であるが、like, near, opposite, worth など前置詞のように目的語を伴う。しかし、いずれの場合においても補助部は後位用法 (postpositive use) に限られている。ところが、古英語の形容詞の場合、補助部は前置詞句、名詞句、(代) 名詞のいずれでもよく、後位用法のみならず、前位用法 (prepositive use) も許されている。しかも、この前位用法は韻文のみならず散文でも少なからず生じることから、何が前位用法を許容するのかが問題となる。本稿の主な目的はこの要因を探ることにある。

本論に入る前に、古英語の形容詞と補助部の関係、とりわけ補助部の格について明らかにしておきたい。補助部が前置詞句ではなく名詞 (句) を伴う場合、これらの名詞 (句) の格は属格または与格に限られるが、この格の決定は一般に形容詞の意味に依存している。たとえば、「幸福」や「感謝」、またはこれらとは逆の概念である「絶望」や「忘恩」を表す形容詞 *blīpe* 'joyous', *ēadig* 'fortunate', *glæd* 'cheerful', *ge-sund* 'prosperous', *un-wēne* 'hopeless' などの補助部は属格形であるが、「適切」、「妥当」、「当然」およびこれらとは反対の概念を表す形容詞 *āgen* 'proper', *ge-mæne* 'general', *swīce* 'deceitful', *weorþ* 'worthy' などの補助部は与格形である (Mitchell 1985: §§ 192-219)。ちなみに、属格の補助部を伴う形容詞は散文より詩の方が多いという研究も知られている (Mitchell 1985: § 199)。このように、形容詞と補助部の格の関係についてはこれまで詳細な研究がなされてきているので、本稿では特に必要でない限り、詳しく検討しないことにする。しかし、形容詞と補助部の統語関係については、信頼に足る情報は先行研究からは得られない。たとえば、Carlton (1970) による古英語の Charters の統語研究の場合、文の主要構成素である主語、目的語、

補語（およびこれらの統語単位の主要部となりうる名詞や形容詞）、動詞などの統語関係はかなり詳細に分析・考察されているが、その他の周縁的な構成素については、たとえば本稿で焦点を当てる形容詞とその補助部に関しては、「形容詞は名詞の属格形を補助部として伴うことがある（p.91）」、「属格形の名詞の補助部は形容詞に先行する（p.179）」という貧弱な情報しか得られない。本研究の目的はこのような先行研究に欠けている部分を補完することにある。

本稿では、まず古英語の散文における形容詞とその補助部（以下、必要に応じてそれぞれ A, C と略記する）の関係を明らかにし、次に、古英詩における両者の語順とこの語順を決定する要因を探ることにする。散文のデータは Sweet (1957) の *Anglo-Saxon Primer* から抽出した。同書には 16 ページ分の散文のテキストが収録されていて、テキストの量そのものは多くはないが、異なる書き手による 9 種類の散文から成ることから、個人のスタイルではなく、普遍性に富む言語特徴を捉えるにはふさわしいと言える。一方、韻文の分析対象として Doane (1978) 編の *Genesis A* を選んだが、この詩は全体で約 2300 行から成り、古英詩では *Beowulf* と *Christ* に次ぐ長編であることから、かなり多くの例が採取でき、興味深い分析結果が得られそうである。なお、本稿では必要に応じて形容詞は斜字体、補助部は下線を施してそれぞれ区別することにする。接頭辞付加語と複合語にはハイフンを付けて構成素の関係を示してある。散文からの引用例の該当箇所には (V/16) のように、テキストの章と行を明記してある。

## I. 古英語の散文における形容詞とその補助部の言語特徴

### 1. 1. 名詞（句）が補助部となり、形容詞の後位置を占める場合

最初に、後続の補助部と共に用いられている形容詞は (1) に記した 20 種類(26 例)である。このうち、berende, glæd, ge-fēonde, ge-myndig, welig, wierþe の補助部は属格、cystig, ge-dwolsum, ge-līc, ge-wunelic, ierre, nytne, plēolic の補助部は与格、cēne, ge-scrēpe, ge-trēowe, mære, mihtig, or-sorg, sige-fæst, welig, wierþe の補助部は前置詞句を伴う。なお、berende には名詞句、wierþe には前置詞句を伴う例もそれぞれ 1 つずつある。

- (1) berende 'productive' (2 例), cēne 'brave', cystig 'charitable', ge-dwolsum 'erroneous', ge-fēonde 'rejoiced', ge-līc 'similar' (4 例), ge-myndig 'mindful', ge-scrēpe 'suitable', ge-trēowe 'faithful', ge-wunelic 'habitual', glæd 'glad', ierre 'angry', mære 'famous', mihtig 'strong', nytne 'useful', or-sorg 'safe',

*plēolic* 'hazardous', *sige-fæst* 'victorious', *welig* 'rich' (2例), *wierpe* 'deserving' (2例)

名詞(句)が先行する形容詞の補助部となっている14例を分析したところ、(2a)のように名詞が単独で補助部を形成している1例を除くと、他はすべて句または節である。すなわち、(2b, c)のように名詞句が補助部となる場合が8例と最も多く、(2d, e)のように2つの名詞が並列して補助部を形成している場合が2例、(2f, g)のように補助部が動詞または不定詞句によって形容詞と分断されている場合が2例、(2h)のように2つの形容詞が補助部を共有している場合が1例となっている。なお、(2f, g)の2例を除くと、補助部はすべて形容詞の直後にくることから、両者の間には結束作用(cohesion)が強く働いているものと思われる。これらの例から明らかなことは、補助部が形容詞の直後にくることが多いのは、その長さが原因となっている可能性があることである。ちなみに、これらの形容詞句(すなわち、形容詞+補助部=A+C)が含まれている文の動詞は1例(*do* 'make') (V/8)を除いてすべて *be* 動詞であり、形容詞句そのものは動詞の補語となっている。

(2)(a) *wierpe sleges* 'deserving to slaughter' (VI/72)

(b) *nyrne ȝbrum mannum* 'useful to other men' (V/8)

(c) *ierre þāem mīnum lād-þēowum* 'angry at my guides' (VIII/34)

(d) *plēolic mē ȝþe ængum men* 'hazardous to me or to any man' (V/41)

(e) *cystig wædllum and widewum* 'charitable to poor men and widows' (VI/20)

(f) *hit ge-wunelic is þāem þe* ... 'it is habitual to those who ...' (VI/123)

(g) *ge-dwolsum tō rædenne þāem þe* ... 'erroneous to read to the one who ...' (V/78)

(h) *glæd and ge-fēonde þāra mīnra andswara and worda* 'glad and rejoiced at my answers and words' (VIII/60)

ちなみに、これらの形容詞句が用いられている節の種類を調べたところ、3例(V/8, 41, VI/123)は従属節であるが、他の11例は主節となっていて、若干の分布上の違いが認められるが、該当例が少ないことから、この相違が有意義かどうかは分からない。一方、いずれの例においても形容詞句は動詞の補語となっていて、動詞の後にきている。さらに、(2a, b)以外の例のすべてにおいて、補助部は複数の語から成る句または節を形成していることから判断すると、該当例が全体でわずか13であることから確定的なことは言えないものの、補助部の長さが形容詞の後に置かれることの原因となっている可能性が強い。

### 1. 2. 前置詞句が補助部となり、形容詞の後位置を占める場合

次に、前置詞句が補助部となり、形容詞の後にくる 10 例について考察してみる。10 例のうち 6 例 (I/96, III/11, 42, VII/7, 19, 68) は (3a) のように主語—動詞の直後にくる。この特徴は、(3b) のように主語と動詞が倒置しても変わらない。(3c) では形容詞句は主語と同格となっていて、主語の後に位置する。一方、(3d, e) では、形容詞と補助部は他の構成素によって分断されているが、両者の位置関係に変わりがない。この分析結果から、前置詞句が補助部となっている場合、その長さゆえに、さらには、形容詞との結束作用ゆえに、補助部は形容詞の後、とりわけ直後の位置にくるといえる。

- (3)(a) *Swelce hit is ēac berende on wecga ōrum* 'Likewise it is also productive of ores of metals' (VII/19)
- (b) *Is þæt iægland welig on meoleum and on hunige* 'The island is rich in milk and in honey' (VII/66)
- (c) *Hinguar ūre cyning, cēne and sige-fæst on sǣ and on lande* 'Our king Hinguar, brave and victorious in the sea and on the land' (VI/41)
- (d) *Wierpe is sēo stōw for þǣm weorþfullan hālgan* 'The place is deserving for the honourable holy men' (VI/208)
- (e) *Hit is welig, þis iæg-land, on wæstmum* 'It, this island, is rich in fruits' (VII/6)

1.1. および 1.2. の分析結果を総合すると、補助部は、名詞句であれ、前置詞句であれ、その量的特性と結束作用によって形容詞の直後にくることが分かる。

### 1. 3. 名詞 (句) の補助部が形容詞に先行する位置を占める場合

次に、名詞 (句) の補助部が形容詞に先行する位置に生じる例を取り上げて考察する。まず、この C+A 型の場合に用いられている形容詞は (4) にあげた 16 種類 (19 例) である。ge-lic と ge-myndig は A+C 型の場合と同様、C+A 型でも用いられているが、それ以外の形容詞はすべて A+C 型の場合とは種類が異なる。ただし、現時点ではこの相違に言語的に有意義なものを見出すことはできない。ge-lic と ge-myndig を除く 14 種類の形容詞と補助部の格の関係を見ると、ge-fægne, wierpe, un-glēawe, un-wīse, ge-scrēpe は属格支配、他は与格支配となっている。

- (4) ge-fægne 'glad', ge-hendost 'most intimate', ge-hiērsome 'obedient', ge-lic 'similar' (4 例), ge-mǣne 'common', ge-myndig 'mindful', ge-scrēpe

'suitable', *lēofre* 'dearer', *milde* 'merciful', *sēl* 'good', *un-cūþ* 'unknown' (2例), *un-ge-hīersum* 'disobedient', *un-glēawe* 'ignorant', *un-wīse* 'uninformed', *wierþe* 'deserving', *wīslīc* 'wise'

C+A 型の形容詞句の特徴は、まず第一に、(5) のように大半の補助部、すなわち 12 例が単音節語の代名詞であることである。このうち半数の例では(5a)のように補助部は形容詞の直前にきている。一方、補助部は(5b)のように他の文構成素によって形容詞と分断されることがあるが、この場合においても補助部は形容詞と遠く離れることはない。

(5)(a) *him ge-mæne* 'common to them' (III/4), *þæs ge-fagene* 'glad of it' (IV/101), *þē un-ge-hīersum* 'disobedient to you' (V/95), *þæm ge-līc* 'similar to that' (VI/196), *ūs un-cūþ* 'unknown to us' (VII/99), *þæs wierþe* 'deserving to that' (VII/110)

(b) *Him* *byð sōna sēl* 'It will soon be good to them' (IX/30), *mē nū lēofre* 'now dearer to me' (VI/55), *him eall ge-hīersume* 'all obedient to them' (IV/85), *þē sie milde* 'be merciful to you' (V/95), *him þā ge-hendost* 'then most intimate with him' (VI/49), *mē þyncþ wīslīc* 'seems wise to me' (VII/93)

次に、補助部が代名詞以外の場合について検討してみる。(6a) のように名詞が単独で補助部を形成する例が 1 つ、(6b) のような名詞句の場合が 4 例あるが、いずれも形容詞の直前に用いられている。2 つの形容詞が 1 つの補助部を共有している(6c) の例においても、補助部は形容詞の直前にきている。一方、補助部が長く、しかも前置詞句によって形容詞と分断されている(6d) は全く例外的な存在である。

(6)(a) *Rōmānum un-cūþ* 'unknown to the Romans' (VII/70)

(b) *þæs Hælendes ge-myndig* 'mindful of the Savior' (VI/86), *þæm menn ge-līc* 'similar to the man' (I/11), *ōþrum mannum ge-līc* 'similar to other men' (III/59), *Þissum wordum ge-līc* 'similar to these words' (VII/111)

(c) *þæs landes un-glēawe* and *un-wīse* 'ignorant and uninformed of the land' (VIII/9)

(d) *ælcra ieldu and hāde þurh tō-dæleda stōwa ge-scrēpe* 'suitable for each man and both sexes throughout diverse places' (VII/19)

次に、形容詞句全体が文中で占める位置を調べたところ、従属節に生じるのは 5 例 (III/4, V/95, VI/49, VII/99, VIII/9) であるのに対して、主節にはその約 3

倍、すなわち 14 例 (I/11, III/59, IV/85, 101, V/95, VI/55, 86, 196, VII/19, 70, 93, 110, 111, IX/30) が生じていて、A+C 型とほぼ同様の頻度であることが分かる。形容詞句と直接統語関係にある動詞は *byncþ* ‘seems’ (VII/93) を除いてすべて *be* 動詞であり、この点に関しても A+C 型と同様の特徴が表れていることになる。一方、A+C 型と大きく異なる特徴としては、形容詞句全体が節内の動詞に先行する例が、A+C 型では皆無であったのに比べて、8 例 (IV/85, 101, VI/49, 55, VII/99, 110, 111, VIII/9) も生じていることがあげられる。すなわち、これらは SOV 型の語順の特徴を示していることになるが、この 8 例のうち 5 例 (IV/85, 101, VI/55, VII/110, 111) は主節、他の節は従属節であることから、主節・従属節という違いがこれに関与しているのではなさそうである。

#### 1. 4. 前置詞句の補助部が形容詞に先行する場合

最後に、前置詞句の補助部が形容詞に先行する場合について考察してみる。これに該当するのは (7) の 1 例だけであり、やはり形容詞の直前に用いられている。1.2. で見たように、A+C 型の場合、前置詞句が補助部となり、形容詞の後にくる例が 10 であったことを考えると、形容詞に先行する前置詞句の補助部の例がわずか 1 つ、しかも句全体で 2 音節しかないというのは単なる偶然ではなく、長くなりがちな前置詞句の補助部を形容詞の前に置くことに対する書き手のためらいが強いことの反映であると解釈できよう。

(7) is on þæm sweotol þat ... ‘it is evident from this that ...’ (VII/28)

#### 1. 5. 第 1 節のまとめ

古英語の散文の場合、形容詞の補助部は、名詞 (句) であれ前置詞句であれ、形容詞の直後が無標の位置と言える。したがって、形容詞の直前は有標の位置ということになるが、この位置を占める補助部は名詞 (句)、前置詞句を問わず、短いものが好まれる傾向にある。

### II. 古英詩における形容詞とその補助部の言語特徴

#### 2. 1. 名詞 (句) が補助部となり、形容詞の後位置を占める場合

A+C 型の形容詞句の場合、用いられている形容詞は (8) にあげた 13 種類 (16 例) である。このうち、*ærest*, *dōm-fæst*, *ge-lic*, *hnēaw* は属格、その他は与格の補助部を伴っている。散文の場合と比べて大きく異なるのは、今回分析対象とした詩の方がコーパスとしてはかなり規模が大きいにもかかわらず、形

容詞の種類と例がいずれも少ないことである。

- (8) *ærest* 'first' (2 例), *cūð* 'known', *dōm-fæst* 'powerful', *fāh* 'hostile', *fægn* 'rejoycing', *frōd* 'old', *ge-līc* 'like', *gifeðe* 'granted', *hnēaw* 'stingy', *lēof* 'dear' (3 例), *un-blīðe* 'unkind', *un-spēdigran* 'less productive', *yrre* 'angry'

次に、名詞(句)から成る補助部について分析したところ、単一の名詞が補助部となっている 12 例の場合、(9a) のように、最低でも 2 音節、長いものは 5 音節から成っている。一方、(9b) のような句は 4 例あるが、長行の境界で分断されていたり、他の文構成素によって隔てられている。これらの補助部の最も顕著な特徴は、大半の例において(すなわち、16 例中 12 例で)、補助部は形容詞の直後にきていて、韻律の必要性に加えて、結束作用が強く働いていると思われる。しかし、他の 4 例は他の文構成素によって分断されている。このうちの 1 例は(9c) のように同一行内にあるが、他の 3 例では形容詞と補助部は(9biii) のように他の語句によって分断された上に、次行に回されている。このように、詩においても、名詞(句)の補助部が形容詞の後にくることがあるが、この理由の 1 つは、散文の場合と同様、補助部の長さにあるものと思われる。なお、以下の引用例において、/ は第 1 半行と第 2 半行の境界、// は長行の境界を示すものとする。さらに、a は第 1 半行、b は第 2 半行をそれぞれ表すこととする。

- (9)(a)(i) *fāh werum* 'hostile to men' (1291a)  
 (ii) *frōd fyrn-dagum* 'old by virtue of many days' (1072a)  
 (iii) *cūð* // *burh-sittendum* 'known among men' (2815b-6a)  
 (b)(i) *un-spēdigran* // *fremena ge-hwilcre* 'less productive of every advantage' (962b-3a)  
 (ii) *ge-līc godes* // *neorxna-wange* 'like God's Paradise' (1923b-4a)  
 (iii) *un-blīðe* / *abrahames cwēn*, // *hire worc-peowe* 'Abraham's wife (became) unkind to her male servant' (2261a-2a)  
 (c) *yrre* / *god abimelehe* 'God (was) angry at Abimelech' (2742)

## 2. 2. 前置詞句が補助部となり、形容詞の後位置を占める場合

*Genesis A* では、前置詞句の補助部が形容詞の後にくるとのは(10)にあげた 6 種類(6 例)のみであることから、散文の場合と比べてかなり数が少ないことが分かる。また、散文で用いられている形容詞と同一のものは見あたらないが、これは該当例が少ないことによるものと思われる。

- (10) *fēa-sceaft* ‘helpless’, *glēaw* ‘wise’, *lēof-lic* ‘pleasant’, *milde* ‘merciful’, *rice* ‘mighty’, *sār* ‘painful’

次に、A+C 型を構成している形容詞と補助部の関係について検討してみたところ、後者はいずれも前者の直後にきていて、(11a) の場合のみ前置詞句は次行に回されているが、(11b) にあげた他の 5 例ではすべて形容詞と前置詞句は共に第 1 半行または第 2 半行という枠内に収まっていて、結束作用が強いことが分かる。

- (11)(a) *ac hē bið ā rice // ofer heofen-stōlas* ‘but he shall be always mighty above the thrones of heaven’ (7b-8a)
- (b)(i) *fēa-sceaft mid fremdum* ‘helpless among the foreign people’ (2837a)  
 (ii) *glēaw on mōde* ‘wise in heart’ (2375a)  
 (iii) *lēof-lic on life* ‘pleasant in life’ (1713a)  
 (iv) *milde on mōde* ‘merciful in mind’ (2758a)  
 (v) *sār on mōde* ‘painful at heart’ (2216b)

## 2. 3. 名詞(句)が補助部となり、形容詞の前位置を占める場合

補助部の名詞(句)が形容詞に先行する C+A 型の場合、A+C 型の場合とは対照的に、用いられている形容詞は(12)に示したようにきわめて多く、48 種類にのぼり、該当例も飛躍的に増え、84 に達する(なお、1770a と 1247 ではそれぞれ異なる形容詞が 1 つまたは 2 つの補助部を伴っている)。このような際立った特徴は、散文の A+C 型と C+A 型のいずれの場合と比較しても頻度に大きな差が見られることから、綿密な検討を要する。

- (12) *ār-fæst* ‘merciful’, *ærest* ‘first’ (2 回), *dēore*, *dýre* ‘precious’ (2 回), *dihtig* ‘strong’, *dōm-ēadig* ‘blessed’, *fæst* ‘fast’, *fēa-sceaft* ‘destitute, helpless’ (3 回), *forð-wearde* ‘continuous’, *fremde* ‘remote’, *frōd* ‘wise’ (5 回), *from(e)* ‘strong, rich’ (2 回), *fulle* ‘full’, *ge-dwolene* ‘errant’, *ge-lice* ‘like’, *ge-mæne* ‘common’ (3 回), *ge-myndig* ‘mindful’ (6 回), *ge-nihtsum* ‘satisfied’, *geong* ‘young’, *georene* ‘eager’, *ge-sælig(e)* ‘rich, blessed’ (2 回), *ge-tenge* ‘near’, *ge-wlō* ‘ornamented’, *gōd* ‘good’, *hold* ‘kind’, *hýdig* ‘thoughtful’, *lād(e)* ‘hateful’ (3 回), *lēas(n)(e)* ‘deprived’ (6 回), *lēof* ‘dear’ (5 回), *lēofost* ‘dearest’ (2 回), *mæne* ‘well-known’, *mæst(e)* ‘greatest’ (3 回), *mōdige* ‘arrogant’, *nytte* ‘useful’, *of-þyrsted* ‘athirst’, *on-drysne* ‘venerable’, *sārost* ‘most painful’, *scyldige* ‘sinful’, *sēoce* ‘hurt’, *spēdig* ‘successful’, *swice*



'false', swið-feorm 'well-supplied', til 'good', þriste, ðriste 'audacious' (3 回), þrýðge 'strong', un-lēofe 'not dear' (2 回), welig 'rich', wrǣð 'wroth', wyrðe 'worthy', ylðre 'elder',

最初に、補助部の格について述べておきたい。補助部は、*ærest*, *fēa-sceaft*, *ge-myndig*, *ge-nihtsum*, *georne*, *lēas*, *lēofost*, *mæst*, *of-þyrsted*, *sārost*, *wyrðe* に伴う場合は属格であるが、その他はすべて与格となっている。ただし、*riste* については、補助部は *womma* 'sins' (1272b) と *synna* 'sins' (2583a) の場合は属格となっているが、*synnum* 'sins' (1935b) は *synna* と同一語であるにもかかわらず、与格となっている。この点については、前述の Mitchell (1985) で詳しく記されているので詳細は省くことにする。興味深いのは、たとえば、*frēo-magum lēof* 'dear to his kinsmen' (1183b) や *gōde mære* 'well-known for good deed' (2200a) のように、形容詞の原級と比較級の場合には与格の補助部を伴うが、*monna lēofost* 'dearest of men' (1749a), *holm-ærna mæst* 'greatest of sea-houses' (1422b), *monna ærest* 'first of men' (1085b) のように、最上級の場合には属格を伴っていることである。これは、形容詞の意味がより限定されることに基づくものであろう。

より注目すべきことは、形容詞と補助部の統語上および韻律上の関係にある。すなわち、全 82 行のうち、9 割近い 73 例において、補助部は形容詞の直前に位置し、しかも、C+A から成る形容詞句全体は 1 例 (1631 行) を除いて、第 1 半行または第 2 半行のいずれかの枠内に収まっていて、他の半行や長行にまたがることはないということである。さらに、補助部のもう 1 つ別な特徴として、名詞句となっている (13a) の 2 例を除くと、(13b) にあげた代名詞と数量詞の 5 例を含め、他の 80 例はすべて単一語に限られていることがあげられる。そして、これらの単一語は、(13b) の 5 例の無強勢語を除いてすべて頭韻に加わっている。このことから判断すると、補助部が形容詞に先行する C+A 型の例が A+C 型の場合と比べて圧倒的に数が多いのは、頭韻の都合によるものと思われる。さらに、語数の多い句がこの種の補助部を占める例が全く見られないが、このことも頭韻と関わっているようである。なぜなら、たとえば (6d) のような長い句が形容詞の前にあると、頭韻は、頭韻上の優先順位の高い複数の名詞に実現し、長行が完結し、形容詞は次行に回され、その結果として、統語上および意味上の不明瞭さが生じやすいからである。ちなみに、形容詞句の主要部である形容詞が先行する補助部と切り離され、次行に回されたことにより、結束性が損なわれ、いかに文意が不明瞭となるかについては、(14f) の例

を検討する際に触れることにする。なお、本稿では頭韻に関わる部分は必要に応じて肉太の文字で表すことにする。

- (13)(a)(i) his waldende *lēof* ‘dear to his Ruler King’ (2862b)  
 (ii) þām werode *wrāð* ‘wroth at that host’ (35a)  
 (b)(i) him forð-wearde ‘continuous to them’ (1658b)  
 (ii) unc ge-mæne ‘common to us two’ (1904b)  
 (iii) him hold ‘kind to him’ (2369b)  
 (iv) unc mōdige ‘arrogant to all’ (1907a)  
 (v) eallum *lēof* ‘dear to all’ (79b)  
 (c)(i) dædum from ‘strong in deeds’ (2308b)  
 (ii) wære ge-myndig ‘mindful of the covenant’ (2374b)  
 (iii) wine-māgum *lāð* ‘hateful to friendly kinsmen’ (1021b)

次に、一般性に欠けると思われる 10 例について検討したい。まず、(14a) はすでに指摘したとおり、補助部が平行の境界をまたいで形容詞の直前にきている唯一の例であるが、これは A+C 型でも 1 例生じていたものであり、作詩上の許容度はそれほど小さくはないものと思われる。ちなみに、結束性の高い複数の語が平行をまたぐという例は古英詩では意味上または統語上それほど不自然なことではない。(14b) は形容詞が 2 つ用いられていることから結果的に平行またがりとなったにすぎないものであり、許容される範囲内での現象である。(14c) は補助部を構成する 2 つの名詞に加えて、形容詞も 2 つ並列した結果、形容詞が次の行に回されたことに伴うものであり、2 行間で全く別の種類の頭韻が実現していて、特に不自然なものとはなっていない。(14d) では、補助部と形容詞の間にこれら 2 つの語と意味上または統語上密接ではない語句が介在しているが、このような例は散文でも時おり見られ、特殊なものではない。また、(14e) の 2 例については、頭韻の都合により語が移動した結果によるものと思われるが、この種の例は古英詩ではかなり頻繁に生じる。一方、(14f) の 3 例は韻律の都合を考慮してもかなり不自然な例であり、このような例では結束作用が働きにくいことから、古英詩を難解なものにしてしまう。

- (14)(a) *þæt hē mon-cynnes / mæste* *hæfde* ‘that he had the greatest among mankind’ (1631)  
 (b) drihtne *dýre* / and dōm-ēadig ‘dear and blessed to the Lord’ (1247)  
 (c) golde and seolfre, // *swið-feorm* and *ge-sælig* ‘well-supplied and rich with gold and silver’ (1769b-70a)

- (d)(i) tūddor bið *ge-mǣne* 'will be common to the offspring' (914b)  
 (ii) dugebūm wæron // swīðe *ge-sǣlige* '(they) were greatly blessed among the multitude' (17b-8a)
- (e)(i) hēr-būendra / hearpan *ǣrest* 'first of dwellers on earth ... of a harp' (1079)  
 (ii) ge-seah un-rihte / eorðan *fulle* '(he) saw the earth full of injustice' (1292)
- (f)(i) nāron metode ðā gýta // wīd-lond ne *wegas nytte* 'then neither the broad lands nor ways were yet useful for the Lord' (155b-6a)  
 (ii) him wæs frēa engla // word, *on-drysn*e 'the word of the king of Angels was venerable to him' (2861b-2a)  
 (iii) wes bissum lēodum nū // and *mæg-burge* / *mīnre ār-fæst* 'be now merciful to this country and my descendants' (2825b-6)

この節における分析結果から明らかになることで最も顕著なことは、形容詞に先行する補助部、とりわけ単一語の補助部がきわめて多いこと、および形容詞と補助部の間の結束作用の強さである。そして、これらほとんどの例について、韻律、とりわけ頭韻の関与が大きいことである。散文で多かった A+C 型の例とは対照的に、古英詩では C+A 型の例が圧倒的に多くなっているのは頭韻によるものであることが明らかとなった。

## 2. 4. 前置詞句が補助部となり、形容詞に先行する場合

散文の場合と同様、前置詞の補助部が形容詞に先行する例が古英詩でも用いられることがあるが、該当するのは (15) の 2 例だけであるのはとても興味深い。すなわち、韻律の都合により古英詩の語順にはかなりの許容度があると一般に思われているが、実際には形容詞に先行する前置詞句の例がこのように少ないとなると、古英詩の統語を見直す必要性が出てくる。すなわち、韻律の干渉が多い場合とそうではない場合とを詳細に見極めることがいっそう重要になってくると言える。

- (15)(a) mē on ferhðo *frēo* 'absent from my mind' (1255a)  
 (b) in filistea / folce *eard-fæst* 'settled among the Philistine's people' (2835)

## 2. 5. 第2節のまとめ

古英詩の場合、補助部が形容詞に先行する例が散文の場合よりも圧倒的に多

く、しかも短い語(句)が大半を占めているが、この主な原因は頭韻の都合によることが明らかとなった。

### まとめ

古英語の散文において補助部が形容詞に先行するのは、古英語では SVO 言語と SOV 言語の特徴が混在していることに起因するものと思われる。すなわち、古英語では、SOV 言語の特徴である、本動詞+助動詞、目的語+前置詞、名詞+形容詞などの語順はもとより、補助部+形容詞という無標の語順が依然として広く認められているからである。古英詩にも C+A 型の語順が頻出するが、この場合は、無標の語順であることに加えて、頭韻の必要性も大きく関わっていると言える。

### 参考文献

- Carlton, Charles. 1970. *Descriptive Syntax of the Old English Charters*. The Hague: Mouton.
- Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Doane, Alger N. (ed.) 1978. *Genesis A: A New Edition*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- Mitchell, Bruce. 1985. *Old English Syntax*. 2vols. Oxford: Clarendon Press.
- Sweet, Henry. (ed.) 1957. *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. (revised by Norman Davis) London: Oxford University Press.